

外国籍県民等支援事業

2011 年度～2020 年度研究活動実施結果

研究テーマ	頁	掲載資料			
		2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	
プロジェクト研究 外国につながる子どもたちの高等教育を可能としたもの	276	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書		
外国につながる子どもたちの進路選択と母語文化	281	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書		
日本語未習得の長期滞在者についての研究	285	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	
進路選択と母語文化との関係についての研究	291	2012 自己評価調書			
日本語教育教材開発事業（県民提案事業）	293	2012 自己評価調書			
外国籍生徒支援教材作成事業	295	2012 自己評価調書			
生活者対象日本語教材の受容と評価	297	2013 事業実施計画書			
非文法積み上げ型教材の受容について	298	2014 事業実施計画書			
地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の開発	299	2015 自己評価書	2016 事業実施計画書	2017 自己評価書	
「やさしい日本語」でつなぐコミュニケーションシート 増補	307	2018 自己評価書			
「やさしい日本語」でつなぐコミュニケーションシート 増補	309	2019 自己評価書			
「やさしい日本語」でつなぐコミュニケーションシート 増補	311	2020 自己評価書			

(説明)

- ・研究活動については、2011 年度～2020 年度の外部評価委員会資料の「自己評価書（研究活動用）」について、各年度分を掲載しています。
- ・2013 年度、2014 年度、2016 年度の研究活動については、2014 年度及び 2017 年度に機関評価委員会を開催したため自己評価書は作成していません、事業実施計画書を掲載しています。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	◎坂内泰子、アスティゲタ・ベルナルド、片岡義則、梅田玲子、上原利實
-----	-----------------------------------

【実施結果】

①研究テーマ	第二部会プロジェクト研究「高等教育を可能としたもの」	
②目的	アカデミアの前身となった県立外語短大には、外国につながる学生が比較的多く在籍していた。彼らが言語的ハンデを乗り越えて短大進学を果たせたのはなぜか、短大ではどのように学んだかを明らかにし、高等学校以降の教育機会を望む外国籍県民や支援者、またそういう学生を受け入れる機関の参考となるような成果を提供する。	
③実施内容	①学生を迎える側の外語短大が、組織・制度としてどのような環境を提供していたかについての文献的調査。②外国につながる学生の履修状況等の調査。③聞き取り調査用の質問項目を抽出するための試験的聞き取りの実施。④外国につながる学生に対する聞き取り。⑤教員・日本人同級生からの聞き取り ⑥①～④で得られた資料をもとにした質的分析。（文脈に応じ、学生＝卒業生と読み替えられたい。）	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 本年より3年間 (実施結果) 初年度で①の調査に着手
	他の機関との連携等	(当初計画) 短大同窓会に協力を仰ぐ。 (実施結果) 現段階では正式に申し入れていない。
⑤研究成果の実績と活用状況	現段階では成果をまとめるまでにいたらない。順次、紀要等に発表していく。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 開学以来の外国につながる学生の在籍・履修状況を調査。同様に外語短大の制度的な部分を調査。および、試験的聞き取りと、文字おこし。本格的調査のための質問項目抽出。	

(達成状況)

外国につながる学生の在籍・履修状況の文献的な調査は終了。試験制度を中心とした制度の調査もほぼ終了。試験的聞き取りは終え、文字おこしの段階。

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ほぼ予定通りに進行している。今後、質問項目の抽出作業に取り掛かる必要がある。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 文献的調査に関する部分はほぼ予定通りに進行しているため、今後紀要等で発表することが可能だと考えている。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 当初より3年度計画で始めたものであるため、初年度分のみを取り出して、効果を論じることのむずかしさを感じるが、従来教員が感覚的に感じていたことを制度とのかかわりにおいて記述することが期待でき、客観性を担保できるため、JSL支援講座や日本語教授法入門、コーディネータ養成等の講座での活用が期待できる。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	本学紀要に発表を予定しているが、本年度の報告だけでも、高等機関一特に小規模な短期大学では、日本語を母語としない学生の実態調査に変わるものとして参考になると思われる。また次年度以降、聞き取り調査の進展とあわせて、高等教育で学ぶ外国つながりの学生の様相を報告していく予定である。	

【自由意見欄】

高等教育機関に在籍した外国つながりの学生についての質的調査はあまり行われていない。外語短大が小規模校であったため、教員、外国につながる学生、日本語母語話者の学生の三者の顔の見える関係が保存されており、そこで展開する調査には量的調査と異なる独自性があると考えられる。その基礎となる部分が今年度の研究である。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	坂内泰子、片岡義則、梅田玲子、上原利實
-----	---------------------

【実施結果】

①研究テーマ	プロジェクト研究「外国につながる子どもたちの高等教育を可能としたもの」	
②目的	アカデミアの全身となった県立外語短大には外国につながる学生が比較的多く在籍していた。高等教育に到達した彼らの道のりや短大での彼らの姿を記述することで、教育関係者、支援者等の参考となるような資料を提供する。	
③実施内容	①学生を迎える側の外語短大が、組織・制度としてどのような環境を提供していたかについての文献的調査。②外国につながる学生の履修状況等の調査。③聞き取り調査用の質問項目を抽出するための試験的聞き取りの実施。④外国につながる学生に対する聞き取り。⑤①～④で得られた資料にもとづく質的分析。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 本年より3か年 (実施結果) 初年度①に着手したが、以降は外部評価委員の勧めに従い中止。
	他の機関との連携等	(当初計画) 短大同窓会に協力を仰ぐ。
		(実施結果) 申し入れは中止した。
	⑤研究成果の実績と活用状況	日常業務と本研究テーマが乖離していること、また業務多忙の中で遂行することの負担が大きいことから、昨年度の外部評価委員会において、中止を認められた。しかし、今年度、①のみはまとめることができ、紀要に発表し、関係諸機関に配布した。
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 開学以来の外国につながる学生の在籍・履修状況を調査。外語短大の制度的な部分を調査。および試験的聞き取りと文字おこし。本格的調査のための質問項目抽出。	
	(達成状況) 個人情報のため履修状況の調査はならなかったが、在籍状況や制度については職員や同級生の協力を得てまとめることができた。試験的な聞き取りを行い文字おこし（一部）も手掛けたが、本研究自体を中止したためそのままとなっている。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. <u>やや不十分</u> D. 未達成
	【評価結果の理由】 外語短大に在籍した学生の統計的調査、および制度的な事項の整理、一部のヒアリングにとどまったため。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. <u>やや不十分</u> D. 未達成
	【評価結果の理由】 中止が決まったとはいえ、今後何らかの機会に、外語短大卒業生がインフォーマントとして起用できるよう、外国につながる学生と短大の環境との様相をまとめた。一定の基盤整理ができたと考えている。アカデミア「紀要」に発表済。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. <u>高い</u> C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 紀要に発表した結果は、今後、外国につながる子どもたちと高等教育とを研究する者の参考文献として活用されるものと考え。また、高校生の支援を行っている諸団体に喜ばれた。今後、アカデミアで教育関連の講座を行う際に資料として活用しうる。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	小規模短大での外国につながる学生実態として高等教育機関の参考になると思われる。 また、まとめるにあたって得た知見のみならず、卒業生という人的リソースは講座における情報提供者として起用できると思う。	

【自由意見欄】

業務繁忙に加え、インフォーマントとして有用だった旧短大職員の退職等で、本研究のこれ以上の進展は当面見込めなくなり、残念であるが、最低限のことは整理できたと考えている。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	B. P. アスティゲタ
-----	--------------

【実施結果】

①研究テーマ	進路選択と母語文化との関係についての研究	
②目的	スペイン語圏の子供たちの進路の特性と文化的背景が及ぼす影響を考察する。	
③実施内容	神奈川県のある地域においてスペイン語を母語とする子供たちの進路をアンケート調査で直接に調べ、その結果と調査の対象者の文化的な背景との関連を考察する。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 平成23年度内
		(実施結果) 未定
	他の機関との連携等	(当初計画) 学習支援団体の連携を求める。
		(実施結果) 未定
⑤研究成果の実績と活用状況	この個別研究の目標は、将来的にはスペイン語を母語とする子供たちが将来幅広い職業の選択を行えると同時に、地域コミュニティへの参加が可能になるような地域環境の整備に役立つ情報を提供することだが、現状では彼らに関する具体的な情報がないため、まず現状把握のための実態調査から行う必要がある。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 研究の地域と対象者の設定、アンケート調査の作成、調査の実施とその成果に基づく考察。	
	(達成状況) 未達成	

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】本研究はまだ実行されていない。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】①の評価結果の理由と同じ。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】成果がないので、評価不能。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	アカデミアで行う研究をはじめとする他の業務との時間配分の調整を行い、迅速に本研究に取り組む。	

【自由意見欄】

アカデミアの現行の外国語講座、研修会等の準備とその関連の個人研究に時間をとられ、現在に至るまで本研究を実施する時間がなかった。当初の計画より実行は大幅に遅れているが、本年度中に具体的な成果があげられることを期待している。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	B. P. アスティゲタ
-----	--------------

【実施結果】

①研究テーマ	外国につながる子どもたちの進路選択と母語母文化	
②目的	スペイン語圏の子供たちの進路の特性と文化的背景が及ぼす影響を考察する。	
③実施内容	神奈川県のある地域においてスペイン語を母語とする子供たちの進路をアンケート調査で直接に調べ、その結果と調査の対象者の文化的な背景との関連を考察する。	
④実施方法	実施期間	(当初計画)平成23年度内
		(実施結果)未定
	他の機関との連携等	(当初計画)学習支援団体の連携を求める。
		(実施結果)未定
⑤研究成果の実績と活用状況	この個別研究の目標は、将来的にはスペイン語を母語とする子供たちが将来幅広い職業の選択を行えると同時に、地域コミュニティへの参加が可能になるような地域環境の整備に役立つ情報を提供することだが、現状では彼らに関する具体的な情報がないため、まず現状把握のための実態調査から行う必要がある。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標)研究の地域と対象者の設定、アンケート調査の作成、調査の実施とその成果に基づく考察。	
	(達成状況)未達成	

自己評価調書（研究活動用）（2/2）

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 ④. 未達成
	【評価結果の理由】本研究はまだ実行されていない。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 ④. 未達成
	【評価結果の理由】①の評価結果の理由と同じ。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】成果がないので、評価不能。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	アカデミアで行う研究をはじめとする他の業務との時間配分の調整を行い、迅速に本研究に取り組む。	

【自由意見欄】

アカデミアの現行の外国語講座、研修会等の準備とその関連の個人研究に時間をとられ、現在に至るまで本研究を実施する時間がなかった。当初の計画より実行は大幅に遅れているが、24年度に具体的な成果があげられることを期待している。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	◎坂内泰子、梅田玲子、片岡義則、上原利實
-----	----------------------

【実施結果】

①研究テーマ	日本語未習得の長期在留者についての研究	
②目的	日本語を学ばないまま長期間在留している者について、どういう支援が可能かを考える。	
③実施内容	①資料収集。 ②「外国籍県民のためのはじめての日本語」講座授業記録の蓄積・共有と分析。（出張講座、アカデミア開催講座ともに） ③①、②にもとづく教材開発。 ④①、②にもとづき、長期間在留者への日本語支援のありかた。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 3年間
		(実施結果) 本年が初年度である
	他の機関との連携等	(当初計画) 保健福祉事務所等、本所「外国人のためのはじめての日本語」講座の出張依頼元。
		(実施結果) 今年度依頼のあった厚木保健福祉事務所とは協力関係にある。またNPO MAIKEN（アカデミア事業のバトンを継いだ団体）との情報交換体制も生まれた。
⑤研究成果の実績と活用状況	愛川町における昨年度の試行と本年度の事業をあわせて、8月26日「かながわ自治体の国際化政策研究会」で発表することができた。 また、研究における「気づき」や発見は逐次講座に反映されている。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 授業記録の共有と討議。	
	(達成状況) 十分に行われている。	

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 授業のたびに通常より細かい記録をとり、全員で共有ができ、日常的な関心対象となっているので、議論が深まりやすい。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 分析の点ではまだ直観的な意見交換にとどまっているが、教材は授業のたびに改善が加わり、所内のみならず関係機関との情報交換も行われ始めた（横浜市など）。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 8月26日「かながわ自治体の国際化政策研究会」の研修会等で現段階の状況を県内自治体に紹介することができた。 アカデミアの研修講座には先述2講座のみならず、外国人支援関係のすべての講座に本研究の成果を反映させることができる。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	地域での日本語教育に取り組む自治体や日本語教育団体、福祉関係団体との情報交換を通して、他地域においても「外国人のためのはじめての日本語」講座を手掛けることで、長期在留者の「はじめての」日本語学習事例の収集に努めたい。発表の場は学会等のほか、自治体主催の各種シンポジウムや社会福祉関係の場等も想定しうる。	

【自由意見欄】

研究対象となる者の人権に十分配慮しつつ、彼らにとって有益な結果をもたらす研究であるよう努力したい。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	坂内泰子、梅田玲子、片岡義則、上原利實、滑川恵理子
-----	---------------------------

【実施結果】

①研究テーマ	日本語未習得の長期在留者についての研究	
②目的	日本語を学ばないまま長期間在留している者について、どういう支援が可能かを考える。	
③実施内容	①資料収集 ②「外国籍県民のためのはじめての日本語」講座授業記録の蓄積・共有と分析。（出張講座、アカデミア開催講座ともに） ③①、②にもとづく教材開発。 ④同じく長期在留者への日本語支援のありかたを考える。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 3年間
		(実施結果) 本年が初年度である
	他の機関との連携等	(当初計画) 県保健福祉事務所など「はじめての日本語」講座の出張依頼元
		(実施結果) 厚木保健福祉事務所とは協力関係にある。またNPO MAIKENとの情報交換体制もある。横浜市とも事例の共有を行った。
⑤研究成果の実績と活用状況	愛川町における昨年度の試行と本エンドの事業を合わせて、8月26日「かながわ自治体の国際化政策研究会」、および横浜市主催の「日本語教育事例発表会」において発表。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 授業担当者による授業記録の共有と討議。	
	(達成状況) 十分に行われており、24年度の講座に反映されている。	

自己評価調書（研究活動用）（2/2）

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. <input checked="" type="checkbox"/> おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 愛川町での実践を整理して発表することができた。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. <input checked="" type="checkbox"/> おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 授業記録等の資料はウェブ上で共有し、今年度の取り組みにむけて討議を重ねている。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. <input checked="" type="checkbox"/> 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 比較的特殊な事例（生活困窮者、教師1 学習者10という日本語教室）であるため直接の活用者はいないが、在留者に対する配慮のありかた、行政の支援という点では日本語教育関係者に注目されている。ボランティア養成講座で在留者の様相を語る際に事例を利用、また、生活者教材作成等でも参考にしている。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	これまでの授業記録や個別の意見交換から、在留者にとってどのような教材が自尊意識を高め、継続的学習につながりうるかを討議して、今年度の教材作成にいかしている。今後はそれを発表することを模索し、全国に紹介し、生活困窮者自立のための一助としたい。	

【自由意見欄】

厚木保健福祉事務所等のケースワーカーなど福祉の専門家から助言をいただければと考えている。

自己評価調書（研究活動用）

評価者	坂内泰子
-----	------

【実施目的】

①研究テーマ	日本語未習得の長期滞在者についての研究
②目的・目標	日本語を学ばないまま長期間在留している者について、どういう支援が可能か、また効果的かを考える。

【実施結果】

③実施内容	愛川町で実施している「はじめてのにほんご」講座受講者に対し、なぜできなかったのかを尋ねた。 同時に90年代の愛川町役場で外国人対策を行った元役場職員からの聞き取りを行った。	
④実施方法	実施期間	2年間
	他の機関との連携等	福祉事務所、自治体など
⑤研究の成果物	名古屋で行われた、2012年度日本語教育国際研究集会にてポスター発表（8月18日）	
⑥研究成果の活用状況、波及効果等	外国人の生活困窮者の支援の実情と効果を伝えることができた。また来場者からの質問に答えて、手法等をアドバイスすることで、福祉的な立場からの日本語教育を他地域においても展開する可能性が出てきた。 その後、改めて、東京外国語大学多言語多文化研究教育センターからの照会に応じ、外国人困窮者の支援を考える際の例として対応した。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦計画の実効性	<p>◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。</p> <p>【評価結果の理由】 言語の壁（研究担当者が聞き取り主体になれなかった）と時間的制約のため、満足のいく聞き取りが出来なかった（当事者対象）。 行政側の担当者からは有意義な話が聞けた。 NPOとして愛川を支援している者（学習者の母語に精通）からも教室と学習者についてヒアリングができた。</p>	<p>A. 達成 B. おおむね達成 <u>C. やや不十分</u> D. 未達成</p>
⑧目標の達成度	<p>◇当初計画で立てた目標は達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。</p> <p>【評価結果の理由】 第一段階のことは国際的な場で報告することができた。</p>	<p>A. 達成 <u>B. おおむね達成</u> C. やや不十分 D. 未達成</p>
⑨得られた効果	<p>◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。</p> <p>◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。</p> <p>【評価結果の理由】 ポスター発表の折には、来場者と質疑応答ができ、他地域に刺激を与えることができた。 東外大からの照会もあり、実践の広がりや質的向上につながると考えられる。 アカデミア内部的には、今年度の愛川教室のカリキュラムを考えるうえで参考になった。</p>	<p>A. 十分高い <u>B. 高い</u> C. やや低い D. 低い</p>
⑩研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	<p>当事者への聞き取りを継続する必要がある。</p> <p>と同時に、愛川町の意味（愛川町は外国人で有名にならないことを選んだ）を尊重する必要もあり、現実的に当事者と愛川町にとっての一番よい形で研究を行いたい。</p>	

自己評価調書（研究活動用）

評価者	B. P. アスティゲタ
-----	--------------

【実施目的】

① 研究テーマ	進路選択と母語文化との関係についての研究
② 目的・目標	スペイン語圏の子供たちの進路の特性と文化的背景が及ぼす影響を考察する。

【実施結果】

③ 実施内容	神奈川県のある地域においてスペイン語を母語とする子供たちの進路をアンケート調査で直接に調べ、その結果と調査の対象者の文化的な背景との関連を考察する。	
④ 実施方法	実施期間	平成24年度内
	他の機関との連携等	学習支援団体の連携を求める。
⑤ 研究の成果物	聞き取り調査を実施したが、量的に不足している。	
⑥ 研究成果の活用状況、波及効果等	研究成果は未達成である。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 他の研究を優先した。	
⑧目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 他の研究を優先した。	
⑨得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 研究成果は未達成。	
⑩研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	アカデミアの現行の外国語講座、研修会等の準備とその関連の個人研究に時間をとられ、現在に至るまで本研究を実施する時間がなかった。 予定の研究は次年度に延期するか、取止めるかを検討する。	

自己評価調書（研究活動用）

評価者	坂内泰子
-----	------

【実施目的】

①事業名	日本語教育教材開発事業（県民提案事業）
②目的・目標	県内に居住する外国籍県民が暮らしやすいよう、県内各地の地域実情に応じた実践的な日本語教材を作成するとともに、作成した教材を活用した日本語教授法講座の実施で、ボランティア人材の育成をし、県内日本語教育の一層の充実を図る。

【実施結果】

③実施内容	<p>①教材作成のため、助言や試行場所を提供するワーキンググループ（以下WG）の立ち上げ。</p> <p>②WGの会議を通して、教材化する素材の精査、また同時に、必要に応じて、関連部署（防災局、バス会社、警察署、病院等）への取材。</p> <p>③講師を招き、レクチャーをいただく（生活者日本語関連、医療通訳、国際交流協会、外国人相談等）</p> <p>④教材の作成</p>	
④実施方法	実施期間	平成24年4月～平成26年3月
	他の機関との連携等	特になし（WGメンバーは県内各地域から所属団体の協力を得て参加した者で構成。）
⑤事業の成果物	<p>『つながるにほんご —かながわで ともに くらす—』</p> <p>（25年度には上掲書の、さらに地域に合わせたカスタマイズをするためのガイドブックを作成予定。）</p>	
⑥事業成果の活用状況、波及効果等	<p>本事業を通し、WGメンバーの相互的な学習が推進され、先進的な団体とそうでない団体との乖離の解消につながった。教材をつくるという作業に関わることで、ボランティアの教材を考える力が養われた。アカデミア教員についても、教材作成を通しての学びは大きかった。</p> <p>取材等の協力団体に外国人の日本語の学びについての意識を持っていただくことができた。生活者の教材という点で一般ボランティアからも関心を持って受け止められた。</p>	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦ 計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 予定通り事業を運び、成果物を作成、かつ年度内配布が可能になった。	
⑧ 目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 成果物の印刷・配布が可能になったうえ、PDF化して、アカデミアのホームページでダウンロードが可能にしてある。	
⑨ 得られた効果	◇事業成果は、活用されているか。事業成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 本格的な普及と活用、またその表かは今年度を俟たねばならないが、講座展開がすでに予定されているほか、ボランティア団体からの使用法の出前講座依頼も出てきている。	
⑩ 事業成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	今後、アカデミアだけでなく、県内各地でのサテライト講座を通して広く普及をはかり、カスタマイズ用のガイドブックを作成することで、神奈川県内のボランティア団体や個人に、それぞれの地域性をいかした、生活者のための教材を作る力を涵養したい。 今年度もWGを組織することで、団体の若手リーダー的な者の連携を図り、県内のボランティア団体全体の意識刷新につなげたいと考えている。	

自己評価調書（研究活動用）

評価者	梅田玲子
-----	------

【実施目的】

①事業名	外国籍生徒支援教材作成事業
②目的・目標	外国籍生徒の学習意欲や学習能力の向上を図るとともに教員や支援者等の負担の軽減を図るため、日本語を母語としない中学生のための英語教材を作成し、アカデミア講座で活用するほか、外国籍生徒を受け持つ教員やボランティアの活用に供する。

【実施結果】

③実施内容	①教材作成のため、助言や試行場所を提供するワーキンググループ（以下WG）の立ち上げ。 ②学習支援教室等での試行 ③教材の作成	
④実施方法	実施期間	平成24年4月～平成26年3月
	他の機関との連携等	特になし（WGメンバーは県内各地域の学習支援団体の中核的メンバーおよび国際学級担当（経験）者で構成。）
⑤事業の成果物	『えい・えい・GO！中学1年生』 『えい・えい・GO！中学2年生』 『えい・えい・GO！中学3年生』 文法整理帳 CD-ROM（上記4冊のデータ＋各学年練習帳＋コミュニケーション教材『先生あのね』収録）	
⑥事業成果の活用状況、波及効果等	本事業のWG会議や学習支援教室での試行によって、日本語を母語としない生徒にとって必要な支援は何か、またどのような支援が効果的か、など考えを深めることができ、また教材を普及させていくための足がかりが各地にできた。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦ 計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 どのような教材がもっとも効果的かつ支援者にとって使いやすいか検討を重ね、教材の形に何度も改訂を加えるなどしたため、実際の教材作成に入るのが予定していたより大幅に遅くなってしまった。最終的には年度内に計画をすべて実行できた。	
⑧ 目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 成果物の印刷は終了、配布はおおむね終了している。また教材はすべてPDF化して、アカデミアのホームページでダウンロードが可能にしてある。 県民局長表彰を受けた。	
⑨ 得られた効果	◇事業成果は、活用されているか。事業成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 本格的な普及と活用はこれからであるが、講座展開がすでに予定されている。	
⑩ 事業成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	アカデミアが実施する研修講座や出前講座、教員研修などで教材を取り上げ普及につとめるとともに、受講者やWGメンバーの所属団体等を中心に、使用後のフィードバックを受け、可能な限り教材に修正を加えていきたい。	

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 2部会

担当者 坂内

計画概要

①テーマ	生活者対象日本語教材の受容と評価	
②目的	アカデミアでは昨年度、県民提案事業として、生活者向き日本語教材「つながるにほんご～かながわでともにいきる」（以下「教材」）を作成した。しかし、いわゆる文法積み上げ式の教材を使い慣れた地域の日本語教室にそれが受け入れられるためにはどのようなアプローチをするのがよいか、また、作成した教材はどのような批判を受けるかについて調査し、今後の普及に資する。	
③実施内容	<p>①24年度作成の「教材」の使用法について講座で扱い、受講者の反応を見、受容の可否、使用者には使用後の意見を聞く（量的・質的調査併用）。</p> <p>②講座非受講者に使用法を書いた小冊子を渡し、同じく受容の可否、使用後の意見を聞き、講座で説明することとの比較を行う。</p> <p>③受容した日本語支援者の考え方、団体の特性を調べて整理。</p> <p>④「教材」を使うことで得られた支援者・学習者の変容を調べる。</p>	
④実施方法	実施期間	平成25年度
	他機関との連携等	複数の地域日本語教室、地域国際化協会
⑤目標 (できるだけ具体的に)	講座実施後、速やかに調査を行い、次の講座内容に反映させるとともに、アカデミアを中心にこれからの地域日本語教育のありかたや教材をともに検討できるだけのネットワーク形成につなげる。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	25年度作成予定の「教材」の活用ガイドに反映させることで、「教材」の活発な使用を促す。 紀要・学会等で発表し、本「教材」に限らず、生活者教材の普及浸透に寄与する。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

現場からデータを得る研究ではなく、その結果を早く現場に戻し、現場と研究が相乗作用を生むように心がけた。

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 外国籍県民支援

担当者 坂内・梅田・X

計画概要

①テーマ	非文法積み上げ型教材の受容について	
②目的	アカデミアでは平成24年度に非文法積み上げ型教材「つながるにほんご」を作成し、自治体、交流団体等に配布した。そして平成25年度には教材普及のための講座等を展開し、地域カスタマイズのためのガイドブックも間もなく完成する。その結果を、地域ボランティア日本語教室において検証し、文法積み上げ型一辺倒ともいえる地域ボランティア日本語教室の変容が生まれたかどうかを考察する。	
③実施内容	「つながるにほんご」を配布した団体のいくつかに現状を尋ね、3区分（全然使わない、使ったけれどやめた、使っている）する。その後、詳細な聞き取り調査等を行い、使う／使わないの分岐がどこに生じるのかを、団体特性、活動形態、教材自体など、多面的に分析、また使っている団体については団体の変容とその評価を行う。	
④実施方法	実施期間	平成26－27年度
	他機関との連携等	特にないが、ボランティア日本語教室関係者の協力は必須。
⑤目標 （できるだけ具体的に）	「使う／使わない」の分岐を明らかにし、使ったことによるプラスの変容が認められれば、それを学会等で発表する。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	「つながるにほんご」本冊の改訂、ボランティア養成講座、教材作成講座、またボランティア日本語教室での活動に対する助言に活用。一般に市販されている非文法積み上げ型教材の普及や改善に貢献。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

過去2年の積み上げの評価を行い、プロジェクト終了後も次の実践につながるアクションリサーチ。

自己評価書（研究活動用）

講座群 V-VII

評価者 坂内泰子

実績概要

研究テーマ	地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の開発
①目的	アカデミアへの通室の便等を考えて、ゼロ・ビギナーレベルの外国籍県民への直接指導は現状では停止状態にあるが、ゼロ・ビギナーがボランティアによる地域日本語教室にかかる負担は依然として継続している。よって、ゼロの学習者が突然来室したときに使える教材を提供して、当面の便宜を図り、教室活動の支援とする。
②目標	<p>成果物：ボランティア教室での保管、使用が容易なA4サイズのテーマ別ワークシート教材。基本的にゼロ・ビギナーでも使えるもの。</p> <p>成果物の普及：アカデミアHPからのダウンロード、見本はプリントアウトして研修等で配布。</p> <p>講座への反映：日本語ボランティア入門講座、日本語ボランティア団体研修、日本語教材を知る講座、ライフステージにあわせた支援講座などで活用する。それと同時に、この作成過程が協力ボランティアの力量形成のための長期的ワークショップとして機能することをねらっている。</p>
③実施内容	<p>実施期間：平成27～29年度</p> <p>推進体制：坂内、他全員（27年度は梅田、小島、村上、28年度は小島、村上、嶽肩）、ニーズ調査をしながらボランティア団体から有志をつのる（5名程度、ボランティア研修的な意味合いを持たせた研究なので、特段の実力の高さは求めない）。</p> <p>また、それとは別に最終的な教材の公表に向けて、かつて『つながるにはほんご』作成にかかわったワーキンググループ（以下WG）から、地域日本語ボランティアとしての経験豊かな者を2名、地域で日本語を学習し、優れた日本語力を持つ外国籍県民1名をアドバイザーとして依頼する。</p> <p>進め方：全体の手法としては、ニーズ調査（どのようなものがあるとよいか、使い方例等の必要の有無）をもとにPDCAサイクルに沿って、作成、試用、改善を行って完成させ、ウェブを使って配布する。</p> <p>27年度：Pの段階は、広くボランティアの意見を仰ぎ、その上で地域日本語教室の現実に合わせ、①テキストを用いた学習へのつながりやすさと②ボランティアと学習者間の信頼を醸成できることを重視し、協力ボランティアとともに取り上げるテーマを決定する。</p> <p>教材の形態はA4シートと決め、個別の学習者（例：子育て中の女性）に向けたものも組み入れることも視野にいれている。策定したテーマ（10テーマ程度。各テーマごとのシート数は3枚程度予定）に基づき、教材を</p>

一つずつ仕上げていく。取組むテーマの順序などはアドバイザーの助言を得る。

仕上がったものから協力ボランティアに試用を依頼する。フィードバックに応じて、アカデミア教員が必要な改善を施し、使用法について簡単な説明を付して完成とする。その際も公表前にアドバイザーの助言を得る。

→ Pの段階として、県内全域をカバーする形で日本語ボランティアに対してゼロ・ビギナーへの対応を調査した。この過程で、当初予定したテーマ別の教材の是非を検討するにいたった。テーマ別より、むしろ、初回来室時のニーズ調査の役割を兼ねたり、既存テキストへの架け橋となったりするようなものといった、機能重視の教材を優先させたほうが有効なのではないかという意見が出、本計画を若干修正することになった。提供教材の「使いやすさ」をどのような形で具体化するかをあらためて討議しつつ、5点ほど試作し、有識者からゼロビギナーについてのアドバイスを受けた。その結果、地域日本語教室における多言語混在状況でも活用ができる教材の検討が課題となった。（以前『つながる日本語』WGに参加した者を打診したところ、得意分野ではないとのことで辞退されたため、外部の方をお願いした。）

ボランティアに試用を依頼するところまでは進められなかったが、聞き取り調査を通じて、県内全域に当所と関係深いボランティアが生まれたことは成果の一つである。協力を申し出たボランティアも予定の3倍以上にのぼる。

28年度：H27年度の調査データを参考に施行用教材を作成し、現在同意が得られた協力者を中心に、地域日本語教室での試用を依頼し、教材に対する意見を収集する。その結果に従って教材の手直しを進める。このプロセスを終えたものから順次、ウェブにアップしていく予定だったが、少量ずつの公開よりは、ある程度まとまった量のほうが、インパクトが強く、満足度につながると考えられるため、ウェブ公開そのものを急ぐことはせず、試用と修正を丁寧を実施する。

「アカデミア日本語クラブ」などの機会を利用し、アカデミア作成教材の改善のみならず、協力ボランティア自身が作成した教材の発表・改善の場を提供し、支援者相互の協働を実践できる研究の形をつくとともに、プロジェクトの協力者となるボランティアを通して、各ボランティアの活動基盤となっている諸地域とアカデミアとのネットワークを強めることで、県内の地域日本語教室の現状把握につとめ、29年度事業計画における講座企画、および講座編成の見直しのための検討材料とする。

29年度：当初めざした地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の作成過程を振り返り、使用の手引きをまとめ、HPでの公開を行う。講座、研修等

		の機会を利用して、教材の普及活動を展開する。
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（ アカデミア紀要 ・その他）・出版・ HP掲載
	外部資金	申請（平成28年度分）・ 不要 →27年度 なし
	他機関との連携等	地域日本語教室 →27年度 なか国際交流ラウンジ、厚木日本語教室、横須賀市日本語サロンなど。

成果物等

⑤成果等	成果物及びその普及	27年度：「ゼロ・ビギナーに対するボランティアの意識調査」（『国際言語文化アカデミア紀要』第5号）
	講座への反映	→27年度：日本語ボランティア団体研修（横浜市中区、綾瀬市、厚木市）、日本語教材を学ぶ講座、生活の日本語講座など

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	◇当初計画で立てた目標を達成できたか。 ◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇協力ボランティアによる作成関与やや試用開始には到達できなかったが、聞き取り調査で質的に優れた基礎固めができたことを評価したい。 ◇報告書を作成し、紀要に発表することができた。	
⑦成果の有効性	◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。 ◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇アカデミア紀要が発行されてから間がないため、現時点では読者数が限られているが、地域教室の実情を伝えるものとして一定の評価を受けている。 ◇ボランティアのための各種講座に自信をもって反映させている。	
⑧今後の改善方策	上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等 協力ボランティアの関与の形を明確にして、教材作成・試用をペースにのせることが必要。アカデミア受講者に限らず、より多くの県民への還元のため、教材の普及のための活動も視野にいれてプロジェクトを進める。	

事業実施計画書（研究活動用）

講座群 V～VII
主任者 坂内泰子

計画概要

研究テーマ	地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の開発
①目的	アカデミアへの通室の便等を考えて、ゼロビギナーレベルの外国籍県民への直接指導は現状では停止状態にある*が、ゼロビギナーがボランティアによる地域日本語教室にかける負担は依然として継続している。よって、ゼロの学習者が突然来室したときに使える教材を提供して、当面の便宜を図り、教室活動の支援とする。（*H28年度はかなフアンステーションにおいて小規模ながらゼロビギナー講座を開講予定。）
②目標	<p>成果物：ボランティア教室での保管、使用が容易なA4サイズの単発ワークシート教材。基本的にゼロビギナーでも使えるもの。</p> <p>成果物の普及：アカデミアHPからのダウンロード、見本はプリントアウトして研修等で配布。またこちらから活動拠点に出かけてのデモンストレーションも行う。</p> <p>講座への反映：日本語ボランティア入門講座、日本語ボランティア団体研修、日本語教材を知る講座、ライフステージにあわせた支援講座などで活用する。それと同時に、この作成過程が協力ボランティアの力量形成のためのネットワーキングや長期的ワークショップとして機能することをねらっている。</p>
③実施内容	<p>実施期間：平成27～29年度</p> <p>推進体制：坂内、梅田、小島、村上、ニーズ調査をしながらボランティア団体から協力者をつのる（5名程度）。</p> <p>また、それとは別に最終的な教材の公表に向けて、かつて『つながるにはほんご』作成にかかわったワーキンググループ（以下WG）から、地域日本語ボランティアとしての経験豊かな者を2名、地域で日本語を学習し、優れた日本語力を持つ外国籍県民1名をアドバイザーとして依頼する。</p> <p>進め方：全体の手法としては、ニーズ調査（どのようなものがあるか、使い方例等の必要の有無）をもとにPDCAサイクルに沿って、作成、試用、改善を行って完成させ、ウェブを使って配布する。</p> <p>27年度（終了）：Pの段階として、県内全域をカバーする形で日本語ボランティアに対してゼロ・ビギナーへの対応を調査した。その結果は「アカデミア紀要」で報告している。この過程で、当初予定した、テーマ別の教材の是非を検討するにいたった。テーマ別のものより、むしろ、初回来室時のニーズ調査や、既存テキストへの架け橋となるようなもの、機能重視の教材を優先させたほうが有効なのではないかという意見が</p>

		<p>出、本計画を若干修正することになった。提供教材の「使いやすさ」をどのような形で具現化するかをあらためて討議している（12月）。年度末に地域日本語の有識者からゼロビギナーについてのアドバイスを受ける予定である。</p> <p>調査が長引いたため、教材の試作は28年度になるが、聞き取り調査を通じて、県内全域に当所と関係深いボランティアが生まれたことは成果の一つである。協力を申し出たボランティアも予定の3倍以上になった。</p> <p>28年度：優先度の高いものから教材化し、適宜ボランティアに送り、意見をもらう。可能なら試用を依頼する。その後、ボランティアに当所まで来ていただく形で、教材を仲立ちとしたネットワーク形成を図る。優先度の高い機能重視の数点の作成と並行して、当初予定のテーマ策定を行い、そちらにも着手する。より多くの人に認知してもらうため、1、2団体を選び、活動拠点で当方がデモンストレーションを行う。</p> <p>29年度：策定テーマの大半が完成する予定である。地域日本語教室に提供するのはいままでのないが、日本語教育学会等での発表も視野にいれる。</p>
④ 実施 方法	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・不要
	他機関との連携等	県内のボランティア団体の協力を得る。

上記計画策定にあたって工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

<p>当初案より丁寧に聞き取り調査を行った結果、各地域のボランティアと一定の信頼関係が構築できたため、今年度以降はそのつながりの活用が可能である。ボランティア間のネットワーク形成のための場は試用教材を仲立ちとして設ける。</p> <p>現場のリーダー的なボランティアないし交流協会職員などを招いて意見を乞い、講師のアイデア倒れや独りよがりを防ぐ。</p>

自己評価書（研究活動用）

講座群 V～VII

評価者 坂内 泰子

実績概要

研究テーマ	地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の開発
①目的	ゼロビギナーと呼ばれるような日本語の入門学習者の指導には一定の技量が求められるため、ボランティアによる地域日本語教室には負担が大きい ため、そうした学習者が突然来室したときに使える教材を提供して、負担の軽減を図るとともに、県内での日本語支援の水準向上につとめる。
②目標	成果物：ボランティア教室での保管、使用が容易なA4サイズの単発ワークシート教材。基本的にゼロビギナーでも使えるもの。 成果物の普及：アカデミアHPからのダウンロード、見本はプリントアウトして研修等で配布。またこちらから活動拠点に出かけてのデモンストレーションも行う。 講座への反映：日本語ボランティア入門講座、日本語ボランティア団体研修、日本語ボランティアのための教材を学ぶ講座、はじめてのほんご講座などで活用する。それと同時に、この作成過程が協力ボランティアの力量形成のためのネットワーキングや長期的ワークショップとして機能することをねらっている。
③実施内容	実施期間：平成27～29年度 推進体制：坂内、小島、村上、嶽肩 ニーズ調査をし、ボランティア団体から協力者をつのり、試作品のフィードバックを受けて教材を完成させる。 また、それとは別に最終的な教材の公表に向けて、かつて『つながる にほんご』作成にかかわったワーキンググループ（以下WG）から、地域日本語ボランティアとしての経験豊かな者を2名程度、また地域で日本語を学習し、優れた日本語力を持つ外国籍県民1名をアドバイザーとして依頼する。 進め方：全体の手法としては、ニーズ調査（どのようなものがあるか、使い方例等の必要の有無）をもとにPDCAサイクルに沿って、作成、試用、改善を行って完成させ、ウェブを使って配布する。 27年度（終了）：Pの段階として、県内全域をカバーする形で日本語ボランティアに対してゼロ・ビギナーへの対応を調査した。その結果は「アカデミア紀要」で報告している。この過程で、当初予定した、テーマ別の教材の是非を検討するにいたった。テーマ別のものより、むしろ、初回来室時のニーズ調査や、既存テキストへの架け橋となるようなもの、機能重視の教材を優先させたほうが有効なのではないかという意見が出、本計画を若干修正することになった。提供教材の「使いやすさ」をどのような形で具現化するかをあらためて討議している（12月）。年度末に地域日本語の有識者からゼロビギナーについてのアドバイスを受けた。

調査が長引いたため、教材の試作は28年度になるが、聞き取り調査を通じて、県内全域に当所と関係深いボランティアが生まれたことは成果の一つである。協力を申し出たボランティアも予定の3倍以上になった。

28年度（終了）：調査結果を分析し、教材化を開始した。PDCAのDのステージとして夏までに20点ほどの試作品が完成し、適宜協力ボランティアに配布を開始し、試用とフィードバックの依頼をしている。PDCAのCにあたる。フィードバックは1月以降の予定である。著作権や再配布の問題をクリアしたイラストを見つけるのが困難なため、計画より作成が遅れているが、進捗については、「国際言語文化アカデミア紀要6号」で報告をした。質の高いイラストの確保が大きな課題であるが、それを整えて教材を完成させるために、助成金の申請をした。もし得られれば、イラスト関係の諸問題が相当程度解決するが、教材を「やさしい日本語」とリンクさせることが求められる。その場合、若干の軌道修正が入るが、結果的には、当初の予定より広範な使い方が可能なものとなると予想される。

29年度（終了） 「やさしい日本語」とともに用いるコミュニケーションシートという観点から、自治体国際化協会の「多文化共生のまちづくり促進事業」の助成を受けることができた。ただし、成果物の完成は対象ではなく、研究開発のためということで、当初申請額の約4分の1に止まり、イラスト関係諸問題の解決までには至らず、昨年度に予定した枚数を仕上げることはできなかった。

しかし、これまでの協力ボランティアから有益なフィードバックを収集して、PDCAのAにあたる段階として、イラストに修正を施し、12月にはさまざまな外国人の現場を知る有識者4名と協力ボランティアとともに公開検討会を実施した。この検討会では、修正済みイラストのほか、新たなイラストシートを5点ほど提示し、意見交換を行った。その際、ラウンドテーブル式で、有識者と協力ボランティアが十分な意見交換の時間を取ることで、ネットワーク形成の機会とすることができた。また、この意見交換での発言は、今後の修正の参考にするため、録音をし、文字おこしを終えた。

以上のような経過を経て、これまで3年間継続してきたビギナー教材の開発という範囲では、8点10枚を確実に完成することができ、使用ガイドとともに、新年度早々にHPにアップしてボランティアに供する予定である。

また、助成を受けての新しい部分として、職業として外国人をサポートする場面を持つ人々19名への聞き取り調査を行った。これは30年度以降の研究開発事業のための調査となるが、それぞれの現場特有の課題や「やさしい日本語」についての見解など、得難い情報の収集ができた。業務遂行のためのコミュニケーションシートの開発を次年度の課題として取り組む所存である。

また、今年度の研究をもとに、開発事業の進捗報告と、アカデミア教

	<p>員自身の学習者に対する試行報告との計2本を平成29年度のアカデミア紀要に発表することができた。</p> <p>「地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の開発」というテーマでの研究プロジェクトは一応、平成29年度で終了するが、今後もシートの改訂や増補は行っていきたい。</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表平成27年、28年、29年（いずれもアカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載
	外部資金	申請（平成29年度分のみ）・不要
	他機関との連携等	特になし

成果物等

⑤成果等	成果物及びその普及	<p>27年度：国際言語文化アカデミア紀要</p> <p>28年度：国際言語文化アカデミア紀要</p> <p>29年度：国際言語文化アカデミア紀要、自治体国際化協会実績報告、30年度に入るが、HPでの提供。</p>
	講座への反映	<p>27年度：「ミニワークショップ 日本語初めての人が来た」（かなファンスペシャルウィーク企画参加）</p> <p>28年度：「はじめてのにほんご」「ボランティア団体研修」</p>

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	<p>◇当初計画で立てた目標を達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇完成シート数が当初の予定より下回った。</p> <p>◇着実な成果を上げられ、今後の研究課題にもつながるものである。</p>	
⑦成果の有効性	<p>◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。</p> <p>◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇すでに試行協力をしたボランティアから高く評価されている。</p> <p>◇上記⑤のように、入門学習者対象、ボランティア対象の両面で大変有効である。</p>	
⑧今後の改善方策	<p>上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等</p> <p>平成29年度は助成を受けていることでの時間的制約があったため、点数は少なくても、完成まで持っていくことができたが、今年度は時間的なしばりがない。よって停滞することのないよう、着実に進めたい。また、業務での試用を求めることは難しいので、その点でも独りよがりにならない工夫が求められる。</p>	

自己評価書（研究活動用）

講座群 V～VII

評価者 坂内 泰子

実績概要

研究テーマ	「やさしい日本語」でつなぐコミュニケーション・シート 増補
①目的	ゼロビギナーと呼ばれるような日本語の入門学習者の指導には一定の技量が求められるため、ボランティアによる地域日本語教室には負担が大きい。そのような学習者が突然来室したときに使える教材を提供して、ボランティアの負担の軽減を図るとともに、県内での日本語支援の水準向上につとめる。
②目標	<p>成果物：日本語教室ならびに教室外の場で「やさしい日本語」と共に使用可能なコミュニケーション・シート（増補）。</p> <p>成果物の普及：アカデミアホームページへのアップロード。協力部局への成果物提供。</p> <p>講座への反映：「はじめてのにほんご」講座で教材として使用、またボランティア入門講座、ボランティア団体研修などで積極的に紹介。</p>
③実施内容	<p>実施期間：平成30年度1年間</p> <p>推進体制：坂内、小島、村上、嶽肩</p> <p>平成27年度から取り組んできた入門期学習者対象の教材が平成29年度に完成したが、年度末の完成品は8種のみであった。そこで教材の一層の充実を図り、新たなシートを仕上げるとともに、利用者の利便性を高めるためのガイドを執筆し、最終的には15種68枚におよぶボリュームのあるものを7月末に完成させた。</p> <p>次の作業としてウェブアップがあった。フリー素材を使っていたとはいえ、電子的配布という複製を可能にするため、改めて著作権者や素材提供サイトの許可を求めて交渉し、先方の求める最終形態への加工を行った上で、10月にアカデミアHPでの公開に至った。</p> <p>一方、当初予定していた福祉関連の専門家のためのシート作成は、保健センター等の乳児歯科検診や栄養指導の場面に限定して考えていたところ、過去の研修においてコミュニケーション・シートの紹介を行った保健センターから、センターの医師が作った挿絵つき説明シートのチェックを求められた。素材としてのイラストや専門的な場面選定を見た段階で、当所に可能なことは、専門家の持つイラストの効果を高める「やさしい日本語」的部分であることが感得され、専門分野でのシート開発はしっかりした連携体制なしでは無謀であると考え、この時点で断念した。</p> <p>その後、次年度に向けて災害をテーマに外国人に提供するシート開発を目指し、災害関連で話し合いを可能にするテーマの選定や、並行してイラストレータ探しを行った。</p>
施 方	<p>成果発表</p> <p>学会等発表・論文発表平成27年～30年（いずれもアカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載</p>

外部資金	申請・ <input checked="" type="checkbox"/> 不要
他機関との連携等	特になし

成果物等

⑤ 成果等	成果物及びその普及	30年度：国際言語文化アカデミア紀要第8号で経過報告。 成果物のHPでの提供（PV3月末まで）
	講座への反映	30年度：「はじめてのほんご」 行政窓口研修（保健福祉編）出前

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥ 目標達成度	◇当初計画で立てた目標を達成できたか。 ◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。	A. <input checked="" type="checkbox"/> 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇フリー素材を利用して十分な数のシートを完成させることができた。 ◇HPからのDLが一定数持続しており、ボランティアに利用されていることが窺える。（3月末現在PV数2060。）	
⑦ 成果の有効性	◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。 ◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。	A. <input checked="" type="checkbox"/> 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇県内外のボランティアからおほめの言葉をいただいている ◇日本語学習の場だけでなく、現場を持つ専門家に対してコミュニケーション上のヒントを与えることができる。	
⑧ 今後の改善方策	上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等 コミュニケーション・シートの汎用性は確認できたが、原点である日本語教室での活動充実ということを念頭に置いて、さらなる増補を図りたい。具体的には、従来一方的に教えられている「減災」のための話し合いを可能にするシートの考案に取り組む予定である。	

自己評価書（研究活動用）

講座群 V～VII

評価者 坂内 泰子

実績概要

研究テーマ	「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート 増補	
①目的	地域で暮らす外国人（日本語非母語話者）と日本人（日本語母語話者）とのコミュニケーションが容易になるようなツールとしてのイラストを開発する。	
②目標	<p>成果物：日本語教室ならびに教室外の場で「やさしい日本語」と共に使用可能な、災害時を扱うコミュニケーション・シート（増補）。</p> <p>成果物の普及：アカデミアホームページへのアップロード。</p> <p style="text-align: center;">協力部局への成果物提供。</p> <p>講座への反映：「はじめてのにほんご」講座で教材として使うとともに、今年度は成果物の活用法を扱う講座を開催する。さらにボランティア入門講座、ボランティア団体研修、公務員対象研修などでも積極的に成果物の紹介をする。</p>	
③実施内容	<p>実施期間：2019年度1年間</p> <p>推進体制：坂内、小島、村上、田中</p> <p>平成30年度終了時点で、増補版では災害をテーマに取り上げることを選定していた。しかし地震関連のものは多言語パンフレット等がすでに十分存在していたこと、また、近年、大きな水害が各地で頻発していることから、①的を水害に絞ることとし、②一方的な情報供与でなく双方向性をもった内容にすることに決定した。報道等から必要と思われる場面を精査し、構図などもこちらで主導する形で開発を進め、最終的にはプロのイラストレータに依頼することができた。</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載
	外部資金	申請・不要
	他機関との連携等	特になし

成果物等

⑤成果等	成果物及びその普及	成果物のHPでの提供（令和2年2月末までに3941ビュー）
	講座への反映	「はじめてのにほんご」、「日本語ボランティアのための〈コミュニケーション・シート〉の使い方」講座、ボランティア団体研修、行政窓口研修（保健福祉編）、同 出前

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	<p>◇当初計画で立てた目標を達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>

	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇水害をテーマに日本語の苦手な人たちとも一定の対話が可能になるシートが開発できた。</p>	
⑦成果の有効性	<p>◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。</p> <p>◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇県内のボランティアのみならず、母子保健系の専門職に使われているほか、全国的にも知られるようになった。日本語学習の場で活用されていることを確認している。</p> <p>◇外国人との関わりを持つ専門家がシートを利用することで、外国人とのやりとりにおける視覚的補助の重要性が認識されるようになった。</p>	
⑧今後の改善方策	<p>上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等</p> <p>補助シートを一刻も早く完成させ、〈ともに語る水害の備えと復興〉が地域で可能になるよう、ウェブ・アップを急ぐ予定である。</p>	

自己評価書（研究活動用）

講座群 V～VII

評価者 坂内 泰子

実績概要

研究テーマ	「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート 増補	
①目的	地域で暮らす外国人（日本語非母語話者）と日本人（日本語母語話者）とのコミュニケーションが容易になるようなツールとしてのイラストを開発する。	
②目標	<p>成果物：日本語教室ならびに教室外の場で「やさしい日本語」と共に使用可能な補助カードならびに活動案（例）作成。</p> <p>成果物の普及：アカデミアホームページへのアップロード。協力部局への成果物提供。</p> <p>講座への反映：「はじめてのにほんご」講座で教材として使用、またボランティア入門講座、ボランティア団体研修などで積極的に紹介。</p>	
③実施内容	<p>実施期間：2020年度12月まで</p> <p>推進体制：坂内、工藤、村上、田中</p> <p>今年度の課題は、プロのイラストレータに依頼することのできたメインとなるイラストの補助として、細部にわたる補助カードの作成と、成果物のHPへの掲載であった。今年度はメンバーの交代のほか、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言の発出もあったが、オンラインを利用して作業を継続することができ、250枚以上の補助カードを整備することができた。その後、災害の季節に間に合わせようと努力し、予定より早く8月中にホームページ上で公開し、無料ダウンロードが可能になった。公開とほぼ同時に文化庁のNEWSというサイトにもリンクを張って利用者の便を図った。</p> <p>コロナ感染症感染予防の措置のため、アカデミアで予定していた活用講座は回数が限られたが、それでも2度実施することができた。また、かながわ国際交流協の求めに応じて、災害ボランティアを対象とした活用のための講座をオンラインで開くことができた。オンライン講座であったため、講座の作りこみでよく連携でき、イラストシートの有用性をどう伝えたらよいかが議論できて、伝え方を洗練させることができた。</p> <p>さらに、紀要原稿をめぐり、研究メンバーそれぞれが「やさしい日本語」とイラスト（視覚的補助）による伝達について、考察を深めることができ、最終年にふさわしい結びとなった。</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（ <input checked="" type="checkbox"/> アカデミア紀要 <input type="checkbox"/> ・その他）・出版・ <input checked="" type="checkbox"/> HP掲載
	外部資金	申請・ <input checked="" type="checkbox"/> 不要
	他機関との連携等	特になし

成果物等

⑤成果	成果物及びその普及	成果物のHPでの提供
	講座への	「日本語ボランティアのための〈コミュニケーション・シート〉の使い方

等	反映	災害編」講座（9月、11月）、かながわ国際交流財団主催による「災害時のやさしい日本語」（12月災害多言語ボランティア対象、講師派遣）実施。
---	----	---

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	◇当初計画で立てた目標を達成できたか。 ◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇水害をテーマに日本語の苦手な人たちとも一定の対話が可能になるシートに250枚以上の補助カードを完備して、予定より早く公開することができた。 ◇研究過程についても、紀要に掲載することができ、当所の開発チームとしてのこれまでの考え方を十分に伝えることができた。	
⑦成果の有効性	◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。 ◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇アカデミアでの講座（2回）で日本語ボランティアに好評であったことに加え、12月には外国人を含む災害多言語ボランティアにオンライン講座として成果物を紹介することができ、高い評価を得た。地域のキーパーソンである外国人から評価されたことは大きな成果だと考える。 ◇当所でも文化庁にリンクを張ったが、地域日本語教育を長年手がけている国際日本語普及協会から照会がかかり、メールマガジンの記事として新たに全国で紹介されたことで、ボランティアの間での活用が見込まれる。	
⑧今後の改善方策	上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等 当所の閉所に伴い、活用のための講座開催が困難となるが、それぞれの立場で何とか普及の努力を続けたい。	